

2009・2010年度 学術研究振興資金プロジェクト

研究テーマ 「ナショナリズム復興のなかの文化遺産:アジア・アフリカのアイデンティティ再構築の比較」

Cultural Heritage in the Revival of Nationalism: A Comparative Study of the Reconstruction of Identity between Asia and Africa

研究組織: アジア文化研究所

研究代表: 私市正年



私市 正年 研究総括・アルジェリア

[研究分担者]

赤堀 雅幸・エジプト

川島 緑・フィリピン

小牧 昌平・イラン

寺田 勇文・フィリピン

根本 敬・ビルマ

Cyril Veliath・インド

丸井 雅子・カンボジア

福武 慎太郎・インドネシア



1. 問題の所在

19世紀後半から20世紀前半までの「近代」に形成されたナショナリズムは、その後は弱体化、ないしは消滅すると言われてきた。ところが1990年代以降、とりわけ冷戦終結以降、そうした見方に反する状況が世界各地で起こった。そのうねりは「ナショナリズムの時代」と呼べるほどの勢いで沸き起こり、国家の根幹を揺さぶった。



(例) ユーゴスラビア紛争、チェチェン紛争、ウイグル民族紛争、タイ・カンボジア国境地域の文化遺産をめぐる衝突、中国の反日運動、日本の歴史教科書問題など。

ではなぜ**1990**年代に入ってから
ナショナリズムは復興したのか？



(仮説)

グローバル化によって「想定された」
コスモポリタンな価値観の成立では
なく、むしろ人々が画一化や均質化
を自らのアイデンティティの危機とし
て認識したことを意味し、それがナ
ショナリズムへの回帰を促した



二つの目的の設定

- ①経済のグローバル化が議論されるようになった**1990**年代以降、文化遺産が各国のナショナリズムの表象や愛国教育の一環としてどのように利用されているのか
- ②文化遺産の保護のあり方が各国のアイデンティティ再構築との関連においてどのような特徴と問題点を有しているのか



エトニ(エスニック共同体)



ネーション

出自や血統神話、歴史の共有、独自の文化、特定の場所(郷土)意識、連帯感

エトニ的要素(出自や血統神話、歴史の共有、独自の文化、特定の場所(郷土)意識、連帯感)

市民的要素(領域的概念・要素、共通の文化、市民的諸権利、法と法制度に基づく共同体)



グローバル化

エトニ的要素

民族・ローカルな文化の枠の破壊、
文化の画一化

市民的要素



暫定的結論

- 20世紀後半から加速化したグローバリゼーションは経済的だけでなく、政治的にも文化的にも画一化を進めた。政治的には、インターナショナルな政治的主権が国民国家を超えて主張されている。文化的には、情報技術の発展が個別の文化を飲み込み、ネーションのエトニ的要素を破壊しつつある。すなわちグローバル化は、エトニ的要素と市民的要素との調和点に立っていたこれまでの近代ナショナリズム(国民)の土台をぐらつかせ、人々のアイデンティティにあらたな危機を生み出した。人々はあらたな危機回避を強いられているのである。それが、ナショナリズムの復興・アイデンティティ再構築であり、文化遺産をめぐる紛争や愛国教育の背後にあるのではないか。

